

歐洲經濟史序説

大塚 久 雄 著

「本書を題して『歐洲經濟史序説』となづけた理由の一つは、中世より近世にかけての歐洲經濟史の動向を——ウェバーの語になぞらへて言へば——*ursächlich erklären* し得る『鍵』の存在を本書のテーマとするからである(序)」。而して「毛織物工業は、近世初頭以來開始せられたヨーロッパ商人の世界的活躍、彼等の世界的規模における商業戦にとつて、まさに「隅の首石」となつた。……而して世界商業における覇權の推移、商業國民の興亡は、本國における毛織物工業の隆替を樞軸として決定せられる(三一—三二頁)」とせられる著者が、本論を「前編近世歐洲經濟史に於ける毛織物工業の地位、後編毛織物工業を支柱とせる英吉利資本主義の展開」の二編に分ち、毛織物工業の發展を中心に其考察を進められるのは極めて當然である。而も其を西班牙以下列國の其に就いては概観に留め、英吉利毛織物工業の究明に主力を注がれんとしたのは、定説の如く、英吉利資本主義の發達が最も順調なる過程を辿つた——従つて其初期資本主義の基礎的部面の支柱をなす毛織物工業の發達組織亦此國に於て最も正常なる型を示すが故に外ならぬ(七五頁)。

私は斯る著者の立場に對し何等疑問を抱く者ではない。寧ろ「經濟史は、基礎的な側面であつても、それ自身でのみ孤立してその必然的發展が十全に解明されうるものではなくして、つねに

具體的な歴史の一契機として他の諸契機と合體してのみ必然的であり得る(序)」とせられ、又其を論述の中に具體化されつゝある著者の經濟史研究に對する態度、並に英吉利毛織物工業への詳細にして綜合的な考察に對しては敬服せざるを得ないのである。

前者は私も亦容易に口にし得ざる歴史哲學の問題に屬し、茲に卑見は許されぬが、後者に見られるマニユファクチュアを中心とせる商業資本と産業資本の概念正確さと、對立をはらみつゝ而も兩者に見られる密接なる連繫への考察は多大の教示をなすものであらう。嘗て幕末時代の經濟的發展段階規定に就き所謂「マニユファクチュア時代」の問題が活潑なる論争の脚光を浴びた事は周知の事である。著者は本書に於て「マニユファクチュア時代」とは如何なる時代か、又斯く規定し得る時代の有無に就いても何等言及せられる處ないけれども、毛織物工業を樞軸に典型的なる發達を遂げ、従つて若し「マニユファクチュア時代」なる一時期が存するならば、其を特徴づく可き現象が最も多く最も明瞭に存するであらう英吉利の「マニユファクチュア」機構に對する研究と謂ふも強ち極言に非ざる本書は、其に幾多の示唆を與へて已まないであらう。

然し乍ら私は、新大陸發見と舊大陸の毛織物工業の關係に對する著者の見解に對し先づ若干の疑問を抱かざるを得ない。即ち著者に依れば「新大陸よりもたらされる『銀』が他方東印度に輸入せられると言ふ關係から、東印度貿易と新大陸貿易とは相互に離れがたく結びつく。といふよりも寧ろ、東印度貿易を營むに不可欠な商品たる『銀』が主として新大陸貿易にもたらされると言ふ事情

から、新大陸貿易に對する東印度貿易の素材的依存關係が成立する。ところで、この新大陸の「銀」を掌握し得るものは一體誰であつたか。いふ迄もなく、織物、就中「毛織物」を豊富且つ低廉に供給し得る者であつた。而して「毛織物」を豊富且つ廉價に供給しうるとは、其の本國毛織物工業が特にゆたかに發達を遂げてゐると言ふ謂ひに外ならない。かくて商業革命展開の歸結として、その本國において毛織物工業のもつとも發達せる國々の商人が新大陸の夥しい「銀」を壟斷し、さらに之によつて結局東印度貿易をもあはせ支配し得るといふ必然性が、その客觀的條件が成立することになつたのである(三〇—三一頁)。而して「新大陸への輸入商品のうちで『毛織物』が決定的に重要な地位を占めてゐた(二七頁)」と。私は銀を中心に展開せる新大陸、舊大陸、東印度間の緊密なる經濟的關係を決して否定する者ではない。然し銀鑛採掘に際し、アメリカ・インディアンの「人命の如き物の數ではなかつたために生産費は殆んど零に切りつめられた(二四頁)」如き植民政策下に呻吟せる新大陸が、果して歐洲工業の最優位にたつ毛織工業への最大の需要者たり得たかを疑はざるを得ないのである。新大陸の銀輸入が歐洲毛織物工業の發達に不可分離的關係があつたとしても、其が市場としての關係に於て成立したとせられる著者の見解は、事實上不可能、論理上矛盾せるものと愚考せざるを得ない。西班牙没落の一因が其植民政策の失敗にあつたのに對し英吉利の隆盛は其成功にあつた、換言すれば前者は唯植民地を原料の單なる供給地として掠奪行爲を擅にせるに對し、後者は廉價

なる原料品の補供地として利用すると共に市場開拓をも怠らなかつた處に歸因するとの説が若し著者に容られるならば「無盡藏に豊富な銀鑛採掘にむしろたゞの低廉な封建的賦役勞働(二四頁)」を強ひた新大陸に、歐洲毛織物工業の死活を制し得る程莫大なる需要を求める事は誤りではなからうか。尤も著者は「以上のやうな新大陸における豊富な銀生産は、植民者たちに異常な購買力をあたへ、新大陸アメリカにおいて忽然として……巨大なる市場を現出せしめた(二七頁)」とし毛織物需要者を新大陸土着民に求めんとせられる様ではないけれども、而も尙私は新大陸における需要に過大評價なきやを疑ふ者である。そして私は、寧ろ毛織物の最大の需要地を舊大陸其物に求める事に依つても銀の輸入は可能であり、東印度貿易亦促進され得ると考へたいのである。

著者は又「イギリスに於ては、十四世紀後半以降『農村の織元』層が漸次形成され來り、而して逆に十六世紀に至つては彼等は『都市の織元』の存在を脅かす迄に成長した。そこで十六世紀以降『都市の織元』は公權力に據つて織物工條例を發布し、或ひはギルド制度を再編成して之を抑止せんとした。しかしその効果は全くなかつた(二二頁)」許りでなく「農村工業の眞只中から……新興工業都市の形成と自生的に進行する産業革命との展望が現れて來る(二三頁)」に對し「オランダでは毛織物マニユファクチュアの發達は基本的に都市の『小親方層』の中のみ閉込められ、而もそれは……煩瑣極まるギルド制度の束縛によつて成長を妨げられるといふ事情が成立した(二九—三〇頁)」、「かくて初期資本

主義の『型』の問題が現れて来る。……その原因は何に求むべきであらうか(二一七頁)。其はイギリスにあつては「土地制度の特質たる封建的土地所有制のいち早く崩壊とヨーロッパ層の成立を基礎として可能であり必然であつた(二二三頁)」に對し「オランダの『都市織元』は……封建的地主と協定を結ぶなり或ひは自ら封建的地主になるなりして、その領主的司法權により『農村の織元』の成長を抑止して失つた(二二八—二二九頁)」からである。換言すれば、斯る型の相違は全く封建制度の崩壊如何に依存すると説かれる。私は、素より斯る事實を無視し、其結論を否定せんとする者ではない。然し私には、是は此問題への一應の解答であつても、尙凡て盡されたとは考へられないのである。著者自ら、問題の核心は土地制度にあり、其解明は他の機會にゆづるとされる。本書を『序説』とせられる所以(二二三頁)であり、或ひは望蜀の讖を免れないかも知れないけれども、本書『序』の詞に期待した私には、尙少しく満されないものゝあるのを覺える。

學年末の慌しさに、本書の眞意を誤り把握して、疑を抱き足りなさを感じたのかも知れない。不遜の妄評を著者に詫びつゝ教示を乞ふ次第である。(時潮社發行、定價貳圓貳拾錢)(西井克己)

大陸支那の現實

藤田元春著

本書は第一篇通説と第二篇地方誌とから成る。通説に於ては版

圖、國名から地形、氣候、動植物の如き自然地理的事項、住民、聚落、産業、言語、宗教、社會に至る人文地理的方面のすべてを網羅し、その叙述の範圍はアジア東斜面の全體を含み、地方誌に於ては所謂支那本部の各地から西藏、新疆、蒙古に互り、附するに滿洲國の一篇を以てしてゐる。

それ故にこれは要約された一篇の支那地誌である。

だが、殆ど教科書的であるともいへるこの體制は、自から支那萬般の事象について讀者に教示するところあらんとする著者の意圖に出でたものであらう。新しく船出する大陸支那の舵輪を握る我々日本國民に何よりもまづその支那を正しく知らしめること、これを措いて著者の念願はない。予輩學窓を出で、二十年、日夕禹域の地理や歴史に親しむものゝ將に勤むべき時は來た。銃後の責務この外にあらじとぞ思ふ。——この調子の高い著者の自序に本書の成立はそのまゝ物語られてゐる。

それ故にこれは單なる一篇の支那地誌ではない。

著者のこの態度は北支の治河を第一の要務とし、交通網の完成を希求し、運河を通ずるの利を述べるなど、自からその抱懐する經綸の片鱗を隨所に現はしてゐる。ことに黄河を南流さして之をその儘にしておいてよいといふのは江蘇江北の地理を知らない人の放言であるといひ、「史記に既に三江五湖の利を論じて以來三千年、現在も猶支那はこの江湖から再び更生するであらうことを信ずる」と叙べる如き、これら著者の立言は常に東西の典籍に目を曝し身親しくその地に旅して得たこの國の地理、歴史への深い